

の下にあり。古へ尾山城と稱する時、廣濟寺と云ふ御堂坊主此の地に住せし頃、其の婢のちよぼといふ者、且暮此の井水を汲みしゆゑ、其の名遺存す。瑞龍公の代と成りても、猶此の水を用ひさせらると云ふ。景周按するに、壽福君もとは芳春夫人の侍女にて、其の名をちよぼと呼べり。されば壽福君後に東丸に居給ふなれば、若しくは其の名を指して隠號となせるかと。平次按するに、利長卿の時まで此の井水を御膳水と稱し召上がられしといふは、鶴丸に居館し給ふ時の事なるべし。また此の井戸の名を壽福院殿の名の隠稱となせるかと富田氏のいへるもの、必ず景周の僻案にして取るに足らず。壽福院殿は利常卿の生母にて、東丸様と稱しけるを、其の諱を井戸の名に呼ぶべきよしなし。殊に此の井は寛文十二年の箕浦五郎左衛門高良が筆記に、三丸の井をおちやしよの井と云ふは、御坊の茶水の井にて今にありと。是即ち今云ふおちよぼが井の事也。鶴丸は三丸の續きなる故に、三丸の井ともいへるもの也。さればおちやしよを、後におちよぼと呼び誤りたるにや。三壺記には、一向宗末寺の御堂坊主に、光西寺居住の時、ちや

く云ふ女あり。朝夕汲みたる井なるにより、ちやくが井と名付け、利長卿の時分まで用ひたりしといへり。按するに、光西寺は即ち廣濟寺が事也。

○御膳水番所跡

金城深秘録に云ふ。御乳母オナノメの井は、壽福院殿東丸に御座ありし頃、御膳水なり故に、其頃は井の脇に、歩士番所ありしが、壽福院殿逝去の後明番所と成りたり。依りて御歩番所とも或は明番所下石垣など、中古の書き物に記載す。といへり。平次按するに、國初以來城中にある井戸、皆水性よからざりけん。金澤宮腰口廣岡に、御茶水と稱する井戸あり。前田創業記に、天正十二年末森後援の時、利家卿歩卒を召され、汝等汲廣岡名水。入簾來。可飲城兵乎。揚鞭。と見えて、藩祖以來の御膳水なりといひ傳へたり。井戸の傍に、御茶水番人の家とて、二戸今にあり。改作所舊記に載せたる元祿七年正月の書翰に、奥御臺所水汲小者、御門往來の焼印札を取落しけるにより、御膳水井の廣岡近邊を穿鑿の事を載せたり。然れば廣岡の井戸は、國初より元祿年間まで百餘年、藩主五世綱紀卿の時代までも、膳水の

召上がられ用になりたりしと聞ゆ。

○三丸

此の曲輪は、鶴丸の下曲輪にて、石川門と河北門との間を郭内とす。有澤武貞の金澤細見圖譜に、承應・明暦の頃までは、三之丸河北・石川兩門を滞りなく貴賤老少男女共に往來せしと也。白鳥堀へ往來の女身を投げしより、御城中とて普通の往來停止となりたと云ふ。と見れば、三州志來因概覽附録に云ふ。三丸は天正の初め、賊魁三林善四郎居す。我が世となりては、三丸の中、承應・明暦の頃までは、貴賤男女を擇ばず往來す。後に白鳥壟へ婦人投身溺死せしより、石川・河北二門の内、妄りに諸人の往來を禁ず。頭註に云ふ。慶長六年微妙公金城にて、尼子半左衛門を手討にし給ひける旨趣は、子小姓部屋にて尼子並に河合内匠酒宴をなし、三練ひきけるをば、歩横目官上せるゆゑとなり。是等も今を以て見れば、事かろき事にあらずや。とあり。

○三丸諸土居第跡

三壺記に云ふ。文祿元年世子利長卿へ被仰含、金澤城の石垣を築かせられ、此時二三丸・西丸・北丸まで人持衆の

